
ARICE

dr.harry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A R I C E

【Nコード】

N 1 6 0 1 B A

【作者名】

d r . h a r r y

【あらすじ】

魔法の世界で魔法を使えないアリスが、様々な困難を乗り越えて「先生」のあとを追うちょっとダークなファンタジーです。アリスは魔法の国のお姫様。キング王とハートの女王のもとで愛情いっぱい育てられていました。でも、アリスもお年頃です。アリスは4年前にどこかに行ってしまった「先生」にずっと恋心を抱いていました。そんなアリスはもう14歳。思春期真っ盛りで家出もしいお年頃です。「最小の思考で最大の答えを導け」「先生」の教え通りに考えたアリスは結果、先生を探す旅に出ることにしました。

「不思議の国のアリス」のオマージュとバトル要素が多分に含まれたお話になる予定です。

プロローグ

戦闘機のプロペラが低く唸る音で目が覚めた。

視界は薄暗く、あたりは湿っぽい。入口にかぶせたカムフラージュの草木から月明かりが漏れてくる。美しい唯一の明かりは、防空壕の中に散った木っ端や土を柔らかく照らし出す。

「満月か」

自分にしか聞こえない小さな声でつぶやいた。

徴兵される前は夜の散歩が日課であったことを思い出す。満月の日は麦畑の柵に腰かけて、小一時間ほど空を見上げた。そんな日々が懐かしい。しかし、今となって満月は自分の位置を敵に知らせるだけの厄介者であった。

男は数人の仲間と一緒にくらい穴倉の中にいた。土の湿り気で濡れた下着が気持ち悪くなり、布をつまみずらした。体中には汗と泥がへばりつき、口の中は血の味といくら吐いてもなくなならない砂埃がみたしていた。

季節は秋。寒くもなく暑くもない季節だったことは僥倖であったろう。外の林では風流にも虫が鳴いていた。

戦争は一般市民である男を徴兵するほどに泥沼であった。隣国との戦争である。もとは同じ民族で、信じる神も同じ、国の規模もほぼ等しいこの二つの国が戦争を始めたきっかけは、元を正せば経済危機によるものだ。

人間の業とは恐ろしい。経済危機などという本来自国でもって解決しなければならぬ課題を他国を貶めて解決しようとしているのだ。そこには一市民程度では到底及びもつかないような大層なロジックがあつて、それで国中を巻き込んだ戦をしようとしているのかもしれない。しかし、勝つにしても負けるにしても人は死ぬ。そして死ぬのは外的な政治を行った指導者ではなく、国民だ。

国民には派手に脚色されたでっち上げの理由を毎日のように宣伝

して戦争をしているため、真実を知るものは数少ない。今も農園で兵隊用の作物を作っている瘦せこけた農家も、家の手伝いが忙しくて学校にいけずにいる子供たちも、すべて「戦争を仕掛けてきた」隣の国が悪いと信じきっている。こちらの国が一方的に宣戦布告したなどとは、夢にも思わない。

自らも一市民である男がその事実を知っているのは、彼がつい最近まで大学で研究をする学生であったからだ。彼の専攻は数学であったが経済科の友人から、四年も前から「近くに戦争が起ころであらうこと」をよく聞かされていた。年が開けて、無事に卒業できたら男は教師になるはずであった。しかし、このままではその夢もかなう前に死んでしまいそうである。

ここについたとき、十畳ほどの穴倉の奥には男の国の旗が土の壁に枝でくくられていた。何より銃殺された自国兵士の亡骸が放置されていた。どうやら、ここに紛れ込んできたのは俺たちだけではないようだった。死後一か月は経っているその軀はすでに一部が白骨化していた。隊とはぐれてここにたどり着き、戦闘機の偵察に脅かされる男たちを選択肢はなかった。死体のタグを取り外し、骸は敵地の土にかえしてやった。

敵地のだ真ん中であつた防空壕は自国の兵士が掘つたものではないだろう。ここは敵地にあるものとは思えないほど大きい防空壕であつた。まるで熊の巣のようにぼっかりと空いた横穴は天然の穴蔵を利用したものであるうと思われた。

一度敵に見つかつていいる壕である。何らかのブービートラップを懸念したが何もなかった。しかし、危ないことには変わりがない。朝になる前に身を隠しながら隊へ合流しなければならぬ。

足は血管を流れる血がすべて鉛に代わつてしまつたかのように鈍重であつた。目は乾き、かすむ。抱きかかえたライフルの弾はすでに使い切つてしまつていたため、先端についた刃物だけが銃剣としての意味だけをなしていた。仕様がなないことだ。他はしらないが、男は戦争素人だ。射撃訓練も、白兵実習も嫌と言うほどしたが、百発

撃つたら一発当たるかどうか。戦争という場の空気はそれだけに彼にとつて重いものだった。むしろ、男は人を殺したくないがためにあらぬ方向へと何発も撃ち込んでいた。それでも、威嚇射撃にはなる。そうかと言つて、どうしようもないときはためらわずに撃つた。死体から得られた弾はハンドガン専用の弾丸だけであつた。仲間たちはまだ十分にライフル弾を持っていたため、それを男にほとんど渡した。リボルバータイプのハンドガン。男が持っている銃は実質腰のホルスターに収めたそれだけであつた。

男は武道愛好会なるものに属していた。数学科出身の教師志望と言つてもやせているわけではない。彼の体は引き締まり肉付きはいいほうであつた。一般人から見れば多少腕っぷしは良いのだろう。しかし、銃器が発達した現代戦においてそれは全くと言つていいほど意味をなさない。一発当たれば、どんな大男も泣き喚く。体に銃弾が残ればそこが壊死してしまう。太い血管を傷つけてしまえば助かる確率は各段に下がる。撃つにしても、撃たれるにしても、この鉛玉の一発が死を決定づける。国のために奮起した若者も、自分の肉が抉られた瞬間に絶望に飲み込まれる。撃たれた人間の戦争はここで終わり、胸に抱いた平和への幻想が砕けていく。死ぬ瞬間にやつと気がつく。「自分はなぜ死んでしまわなければならないのだろう？」どんなに立派な大義名分であれ、平和への展望であれその幻想は鉛玉一発で消え失せてしまうのだ。

シリンダーにゆっくりと鈍色の弾を詰め込んで、男は自問した。私はここで死ぬのだろうか？

誰にでも簡単に答えられる絶望に満ちた解を、男は出せずにいた。その潔の悪さが彼を今日まで突き動かした。

あと十分でここを立つ。貴重な休憩時間を無駄にするわけにはいかない。仮眠を取ろうと目をつむつた。そのときである。

ガンッ！！

乾いた爆音と共にカムフラージュ用の草木が弾け飛んだ。鼓膜が敗

れたかと思つたがどうやら大丈夫のようであつた。

「きづかれた！ここにいたら生き埋めだ。いそいででろ！！」

仲間の一人が叫ぶ。男も体にムチを打って奮い立たせる。足の表面が痛い。手の先が痛い。体中が悲鳴を上げた。それでも走らなければ死ぬのだ。

走ろう。走ろう。走ろう。

しかし、足は言う事を聞かなかつた。そういえば先ほどから右足が湿っぽい。よく見てみると、大きな木片が二つ腿と膝に刺さつていた。混乱の中で月に薄く照らし出された右足を見る。足にはさらに弾丸のような勢いで弾け飛んできたであろう石がめり込んでいて、骨折をしていることもすぐにわかつた。

興奮しているせいか不思議と痛くはない。しかし、走れなかつた。

ああ…なんてことだ。

ガッ！！

第二波がおそい、男の視界は完全に暗転した。

プロローグ（後書き）

あらすじに準拠して進むはずですが。この場面は魔法の世界ではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1601ba/>

ARICE

2012年1月4日01時52分発行